海外レポート	**シンガポール**

「ウクライナ戦争で国民食、チキンライスの危機！？」

碇　知子

シンガポールは知る人ぞ知る B 級グルメの宝庫です。2020 年にユネスコの無形文化遺産に登録された「ホーカー」と呼ばれる屋台料理街では、数多くの比較的安価なローカル料理が楽しめ、中でも人気の高い料理がチキンライスです。蒸したチキン、そのチキンの蒸し汁で炊いたご飯を各店特性のチリソースでいただく。どこのホーカーにも必ず 1 店はある国民食です。

そのチキンライスには、従来、マレーシアからの輸入鶏肉が使われていましたが、2022 年６月１日から、マレーシア政府がチキンの輸出を禁止しました。理由は国内の鶏肉不足と価格の上昇によるものです。養鶏場の飼料の原料となるトウモロコシ、大豆、小麦はウクライナやロシアが主要産出国で、ウクライナ侵攻後、世界的に飼料不足となっています。

さらにマレーシア通貨安も輸入コストを押し上げ、養鶏コストは 2022 年２月から 70%上昇しました。インフレ対策で鶏肉の国内販売価格の上限が定められているマレーシアでは、販売価格が原価割れとなり、操業を止める養鶏場もあり、鶏肉が不足する状況となりました。

一方、食料の約 9 割を輸入に頼るシンガポールには養鶏場はなく、チキンは 100%輸入に依存しています。マレーシアからは生きた鶏を輸入し、シンガポールで処理し、新鮮な鶏肉がレストランや市場に流通していました。冷凍鶏肉はブラジル等から輸入されていますが、生鮮とは質が異なります。シンガポールでは、政府が認可した国からしか輸入できないため、政府は急遽インドネシアからの冷蔵冷凍鶏肉の輸入を認可しました。シンガポールからフェリーで 40 分のインドネシアのバタム島では、シンガポール向けを想定した新たな養鶏場設立案も浮上しています。

その後、マレーシアはカンポンチキンとブラックチキンという 2 種類の鶏の輸出を解禁しましたが、輸出の多くを占めるブロイラーは引き続き禁輸が続いています。シンガポールは輸入元を拡大してはいますが、鶏肉の価格は高止まりしたままです。数か月前は 1 枚 2.5 ドルだった鶏胸肉は、4.7 ドル。1 皿 3 ドル程度だったチキンライスも 4 ドル以上になりました。安くておいしいチキンライスは当分戻ってこないのかもしれません。

【ホーカー街のチキンライス店】

【鶏肉店の様子】

こちらの記事は、昨年８月末に執筆し、中国新聞 SELECT「最前線ビジネスサポーター発」にも一部、掲載されました。